

KTCの個性豊かな授業

「コンコンコン...」
真つ赤な赤い玉が、くるくると宙を舞う。簡単そうに見えるが、いざやってみるとなかなかうまくいかない。

夏の暑さがようやく和らぎ始めた9月下旬、名古屋市内の公民館にたくさんの人々が集まっている。おじいちゃんから子どもまで、皆が一樣に手にしているのは、けん玉。一昔前はおもちゃ箱の中の定番だったが、今ではほとんど見られなくなった。そんな古き良き日本の遊び道具に挑戦しながら、「意外と難しいんだなあ」。そんな声が飛び交う。

「膝のバネを利用するのがコツです！」



地元のショッピングモールのイベントで、KTCけん玉基金のブースを出展。来場者に活動について説明するも生徒の役割だ

そう言うって、鮮やかなけん玉さばきを見せるのは、KTC中央高等学院（以下、KTC）名古屋キャンパスの生徒たち。赤い玉がポンッと軽やかに木の皿に乗ると、わあっと歓声が起った。彼らは月に数回、地元の小中学校や保育園、児童館や公民館などを訪問し、地域の人たちにけん玉を教えている。ここでは大人も子どもも関係ない、世代を超えてみんなが一つのことに夢中になり、つながれる空間なのだ。

でもなぜ、けん玉、だったのか。KTCは通信制高校「屋久島おおぞら高等学校」の生徒を卒業するまでサポートする民間の教育機関。普通校で人間関係がうまくいかなかったり、不登校を経験して転校してきた子どもたちも多い。自分のペースで各地域のキャンパスに通いながら、自由なスタイルで学べるのが特徴だ。さらにユニークなのが、トライアルレッスンと称された選択制の授業。ダンスや歌、手話やヨガなど、普通科目以外のさまざま



地域の子どもにけん玉を指導する1年生の寺田勇司くん(右)。「練習しすぎて筋肉痛なんです」と話してくれた

けん玉で世界の未来を描こう

けん玉の日本記録保持者でもある、KTC中央高等学院の窪田保先生。生徒たちと共に「KTCけん玉基金」を立ち上げ、けん玉を通じて、日本国内の地域交流、モザンビークの学校建設に取り組んでいる。



窪田先生愛用のけん玉

な分野についてプロから学べる。その一つが、けん玉。だった。

けん玉を指導するのは、理科担当の窪田保先生。けん玉先生の異名を持つ彼は、なんと、けん玉の日本記録保持者。大学生時代に大記録を樹立し、卒業後は青年海外協力隊としてモザンビークに赴任。現地の子どもたちに理科を教える傍ら、「日本の遊びを広めたい」と週末などを活用してけん玉教室を開いていた。

「帰国後もしばらくはけん玉で食べていきたいと思っていた」という窪田先生。しかし、モザンビークでの教え子がけん玉の世界大会で優勝し、自分の進路を改めて考え直した。これ以上うれしいことがあるだろうか。そう考えた時、けん玉。に対して一つの満足感を得た自分に気付いた。そして、人の成長にもっと深く携わりたいと強く思い始めたのだ。

そんな時に出会ったのがKTC。そこが彼の新たな人生のステージとなった。

けん玉を通じて遊びと学びをつなぐ

「日本には、遊びの文化が消えつつある。大人が子どもに遊びを教えることも少ない。けん玉を通じて、人と人とのつながりを学んでほしいかった」。そんな思いから、窪田先生はKTCのトライアルレッスンでもけん玉を取り入



協力隊員時代、モザンビークの子どもたちにけん玉を教える窪田先生

れた。最初は「なぜけん玉？」と思っていた生徒たちも、窪田先生の巧みな技を目の当たりにし「もっと上手になりたい！」と、どんどのめり込んでいった。

そんなけん玉先生のうわさを聞き、あちこちから「出張授業してほしい」という依頼が来るように。休日でも「呼ばれればどこでも」赴く。もちろん、窪田先生のけん玉仲間、である生徒たちも一緒だ。「人と話すのが苦手だった」という子も、けん玉をしながらいるんな世代の人と話すことで、「けん玉を教えるのが楽しい」と積極的に参加するようになった。

そして2008年10月、窪田さんは生徒たちと共に「KTCけん玉基金」を立ち上げた。目的はモザンビークに学校を建設すること。「協力隊員時代にお世話になったモザンビークに恩返しをしたい」。心の底ですつとそう思っていた。活動資金は、出張授業で販売し

窪田先生(中央)の右腕となる、KTCけん玉基金の主力メンバー。「けん玉が好きなんです」という卒業生の松井みさん(左)も、ボランティアとして参加を続けている



たけん玉の収益と寄付金。「日本には遊びが広まり、モザンビークには、学びの場が建つ。けん玉を通じて、両国の人たちが幸せになればと思っています」。窪田先生は「国際協力しよう！」とは言わない。しかし先生の思いを、生徒たちは確実に感じ取っている。「小さい時から青年海外協力隊にあこがれていた」という鳥居史高くん(3年生)は、「高校で友達とうまくいかなくて、いつの間にかそんなことも忘れていたんです。でもKTCで窪田先生とけん玉に出会って、自分の夢を思い出しました」。現在、日本語教師を目指して受験勉強に励んでいる。「KTCけん玉基金」を立ち上げて2年。これまで販売したけん玉の数は約2500個、寄付金を含め約150万円が集まった。モザンビークに学校を建設するまで、まだ少し時間がかかりそうだが、活動を支える生徒たちは次々に育っている。

「生徒たちは純粋にけん玉や地域の人との交流を楽しんでいます。それがモザンビークの小学校建設に自然につながっていくば」

けん玉に夢を乗せて、KTCを拠点に、日本とモザンビークはつながっている。



駐日モザンビーク大使がKTCを訪問。モザンビークの歴史や生活環境について話を聞いた